



パイプラインの終着地で

作家・ドイツ在住 川口マーン恵美

破格の親ロシア政策

ドイツがまだ東西に分かれていた時、メクレンブルク＝フォーポメルン州は東ドイツの最果てだった。北はバルト海、東隣はポーランド。風光明媚であるものの貧しい土地だ。今も昔も産業はあまりない。

1990年10月、東西ドイツが統一した。その年の12月、統一後初の総選挙が行われ、突然、政界に躍り出たメルケル氏が、この州の選挙区から立候補して初当選している。その後、この州は、ロシアと直結の海底パイプライン「ノルドストリーム」の終着地となり、ロシアのガスがここを起点に西欧全域に供給されるようになった。以来、パイプラインはこの貧しい州にとっての珠玉の財産であり、それが今日まで続いている。

ノルドストリームが開通したのが2011年、05年に始まったメルケル政権がようやく安定し始めた時期だ。ロシアはソ連時代も陸上パイプラインで西欧にガスを供給してきたが、この新・

海底パイプラインがその規模を激増させた。

これを軌道に乗せたのは、プーチン大統領ととびきり仲が良かったシュレーダー元首相だ。しかし、その後任となったメルケル氏も、ロシアとはあまり仲が良くないふりをしながら、実は一貫して破格の親ロシア政策をとり続けた。ロシアから潤沢に流れ込む安いガスはドイツ経済を潤し、いつしかドイツはEUで一人勝ちと言われるまでになった。それに従い、当然、メルケル首相の権力もメキメキと伸びた。

米国の阻止にも諦めず

20年、ドイツにおける輸入ガスのロシアシェアは55%を超えていた。常識で考えれば、この依存の高さはすでに危険水準だ。しかも、これによりEU全体までが、ロシアガスに深く依存することになった。

ドイツとロシアが、このおいしいプロジェクトをさらに強化しようと思って計画したのが2本目のパイプライン、「ノルドストリーム2」だ。着工は18年。完成すれば、ドイツのロシアガスへの依存は70%を超えるはずだった。

ただ、まさにそのせいで、ノルドストリーム2には最初からEUのほとんど全ての国々が強く反対していた。特にNATOに多くを費やし、西欧をロシアの脅威から守っていたつもりの米国は、その中心であるドイツがロシアと結託し、安全保障を犠牲に大もうけしていることは看過できなかった。そこで、米国は工事に参入した企業を制裁するとして、プロジェクト阻止にかかった。それが功を奏し、2019年末、パイプ

ロシアードイツ間ガスパイプライン

